

主 題：「主に感謝して」

聖書箇所：詩篇100篇

テーマ：この一年を振り返って主にただ感謝すること

さて皆さん、今年最後の礼拝を締めくくるにはこのみことばしかないでしょうということで、今朝は詩篇100篇を見ていきたいと思えます。どうして今回詩篇100篇を見るのか？それはきょうのタイトルにもあるように、今年最後の礼拝を通して何よりも皆さんとしたいのは、主に対して、心からありがとうございます、と感謝することです。

少し振り返ってみてください。この一年もみなそれぞれにいろんなことがあったかと思えます。嬉しいことも楽しいこともある一方で、悲しかったことや難しかったこともさまざまに、大なり小なりあったことでしょうか。しかし、神様はきょうまで変わらずにともにいてくださって、あわれみを示し、守り導いてくださいました。どうでしょう？そんなすばらしい主に対して、喜びや感謝が今私たちの心にあふれているのでしょうか？

今回私たちが見ていく詩篇100篇の表題のところに何か書かれていますね。この詩篇100篇にはこんな表題がついていました。“感謝の賛歌”と。そのことばの通りに著者は私たちに、神様に感謝するというのとはどういうことなのか、特に主の前に私たちがふさわしい態度というのがどんなものなのかを、具体的にここで二つ教えてくれています。ですからきょうはその二つの態度を改めて考えてみましょう。私たちが何よりも愛しているすばらしい神様に、私たちがますます喜びと、感謝する者として成長していくために、最後に一緒によくみことばに耳を傾けてみましょう。まずはいつものようにお読みしますので、詩篇100篇をそれぞれよく見てください。

### 詩篇100篇

「:1 全地よ。【主】に向かって喜びの声をあげよ。:2 喜びをもって【主】に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。:3 知れ。【主】こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。:4 感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。:5 【主】はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」

### ○主に感謝して：主の前にふさわしい二つの態度

#### 1. 喜びにあふれながら 1-3節

では初めに、主の前にふさわしい一つ目の態度から考えてみましょう。一つ目にふさわしい態度、それは「喜びにあふれながら」です。1-2節を読んでいったときに、多分皆さんならすぐに気づいたかと思えます。「喜び」ということばが繰り返されていました。1節を見ても「喜びの声をあげよ。」と言われていました。2節を見れば「喜びをもって【主】に仕えよ。」と言われていました。そしてその後も「喜び歌いつつ御前に来たれ。」と。要するにみことばが教えていることは明白でした。「喜びにあふれて主の前に出るということ、それこそが私たちにふさわしい態度なのだ。」というのです。でも同時に、ここで聖書はただ単に「喜び」とだけ宣べていたのではありませんでした。具体的により三つの喜びの形というものを挙げていたのです。どういうことなのか、もう一度よく見てください。

●喜びの三つの具体的な形：

#### a) 喜びの声をあげること

1節にはまず一つ目の形がこう書いていました。「全地よ。【主】に向かって喜びの声をあげよ。」と。一つ目の形は「喜びの声、叫びをあげること」でした。ここで用いられていたこの「喜びの声をあげる」ということばは、もともと「嬉しくて叫ぶ」とか「大声で喜ぶ」といった意味が含まれています。

また特にこのことばというのは、「戦いに勝利した人たちのあげる喜びの歓声」とか「王様を出迎える人々の嬉しい叫び」というものを表したりもしました。例えばイエス様がエルサレムに入場して来られた時の人々の様子。その様子がこのように記されていました。マタイ21：8-9「:8すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切って来て、道に敷いた。:9そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」」ご存じの通り、この時、道に出て叫んでいた群衆の多くは、残念ながらイエス様が実際にだれなのかを正しくは理解していませんでした。彼らにとってイエス様は罪からの救い主ではなくて、当時苦しめられていたローマ帝国からの救い主でした。確かに彼らの理解というのは、大きく間違っていたのです。それでもこの時の群衆の熱狂的な様子を、私たちは容易に思い浮かべることができません？長く続いていたひどい圧勢の苦しみ。そこから自分たちを助け出してくれるその王がやって来たのだと。ついにやって来た、と確信していた人々はあちこちで大きな歓声をあげていました。イエス様の前を行く者たちもイエス様の後に続く者たちも、そのあまりの嬉しさでいっぱいになって大声で叫んでいたのです。喜びに満ちていた人々、彼らはまさに黙っていることができませんでした。抑えきれない大きな喜びが口からあふれ出していたのです。そしてそんな喜びにあふれた叫び、それこそが、ここで私たちにも求められていた喜びの形でした。それが、主の前に出るのにふさわしい喜びの姿でした。みことばは私たちに言うのです。「【主】に向かって喜びの声をあげよ。」と。

#### b) 喜びの礼拝をささげること

またそれに加えて二つ目の形が2節の前半に書かれていました。2節の前半をもう一度よく見てみるとこう続くのです。「喜びをもって【主】に仕えよ。」と。二つ目の形は「喜びの礼拝をささげる」ということでした。ここで言われている「仕える」ということばには、「自分自身を相手に差し出してその相手に仕えること、その相手に尽くすこと」といった意味や、また「礼拝する」といった意味が含まれていました。ですからここで言われていたのは、私たちがみずから進んで主に仕えるということ、その主を心から礼拝するということでした。もちろんこれは嫌々ながらするものではありません。だれかに強制されるからするのでもありません。私たちが主のために喜んで自分をささげることと言うわけです。

どうでしょう。こんな経験はありません？自分自身の伴侶でも親でも子どもでも友達でも、自分にとって大切に大好きな人を喜ばせたいと何かを一生懸命に用意するようなとき、その心には自然と喜びや楽しみが満ちていたりします。買い物とか飾り付けとか、普段だったら絶対にしないめんどくさいと感じてしまうようなものでさえ、自分が大好きな人、自分が愛している人が喜んでくれるその姿を思い浮かべていれば、それが全然苦にならなかつたりするのです。むしろその大変さというものも含めて全部嬉しいと感じる、そんなことはありません？

ここで言われていたのも同じでした。私たちが主を礼拝するとき、それは決して不平不満にあふれたものではありません。仕方なく渋々するものでもありません。主を礼拝するということが自分にとって何よりの楽しみだからこそ、自分にとって何よりも最高の抑えきれない喜びだからこそ、その喜びをただ口にするだけではなくて、心からの礼拝をささげようとするのです。その身をもってみずから主に喜んで仕えようとするのです。

そしてね、皆さん、忘れてはいけません。このような喜びを伴う礼拝というのは、いろいろな礼拝の形とか選択肢がある中で、最もこれが好ましい、というそんな話ではありません。ただこのような礼拝だけが、神様の前に受け入れられるものでした。申命記28：47-48にこのように書いています。

「:47 あなたがすべてのものに豊かになっても、あなたの神、【主】に、心から喜び楽しんで仕えようとしないので、:48 あなたは、飢えて渴き、裸となって、あらゆるものに欠乏して、【主】があなたに差し向ける敵に仕えることになる。主は、あなたの首に鉄のくびきを置き、ついには、あなたを根絶やしにされる。」神様は喜び

を伴わない中身の無い礼拝を喜ばれるお方ではありませんでした。人々が心から主を楽しみ、あふれんばかりの喜びをもってみずから仕えるそのときこそ、主も大いに喜んでくださるのだというわけです。そんな喜びにあふれた礼拝、それこそが私たちに求められていた形でした。主の前に出るのにふさわしい喜びの姿でした。みことばは私たちに言うのです。「喜びをもって【主】に仕えよ。」と。でもこれで終わりではありませんでした。

### c) 喜びの歌を歌うこと

最後三つ目の形が、続く2節の後半に書かれていました。「喜び歌いつつ御前に来たれ。」と。三つ目の形は「喜びの歌を歌うこと」でした。喜び歌いつつ主の前に出るのです。そしてこれに関してはもう言うまでもなく、みことばは主に対して賛美するというをいつも求めていました。「賛美しなさい」と。でもこれまでの流れを考えたとしても、ある意味主に歌を歌うということは、まさにふさわしい応答だと思いませんか？神様に対して抑えきれないほどの喜びを覚えて心から喜びにあふれて礼拝しているなら、その者のうちには自然と喜びの歌というものが生まれてくるのです。だからこそ聖書の中を見てもさまざまな人物の賛美が出てきていました。例えば、自分たちに迫ってきていたパロの軍勢が目の前で海の真ん中に沈んで主に助けられた時、モーセとイスラエルの民たちは真っ先に何をしていたか？彼らは歌っていました。出エジプト記15：1にこう記されています。「：1 そこで、モーセとイスラエル人は、【主】に向かって、この歌を歌った。彼らは言った。「【主】に向かって私は歌おう。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれたゆえに。」モーセやイスラエルの民たちは主に賛美していました。それだけではありません。サウルを含めたいろんな敵の手から助け出されたその時、ダビデもまた歌っていました。Ⅱサムエル22：1-2にこんなふうに記されています。「：1 【主】が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のこぼを【主】に歌った。：2 彼はこう歌った。「【主】はわが巖、わがとりで、わが救い主、」」彼らは嫌々ながら賛美していたのでしょうか？その心の内に何も無いのにただ歌っていたのでしょうか？絶対にそうではありませんでした。間違いなく彼らは主の成してくださったそのみわざに感謝していました。彼らの心には、ほかの何よりも主を礼拝したいと、その喜びがあふれていました。そしてそれゆえに、その思いが賛美になって現れていたのです。そんな喜びにあふれた歌、それこそが私たちに求められていた形でした。主の前に出るのにふさわしい喜びの姿でした。みことばは私たちに言うのです。「喜び歌いつつ御前に来たれ。」と。

さて、ここで一度立ち止まって考えてみてください。ここまで私たちが見てきたみことばの教えは、もう非常に明白でした。すべてのものが喜びにあふれた叫びを、喜びにあふれた礼拝を、喜びにあふれた歌をもって、主の前に出ることが求められていました。主を礼拝するその者にとって、「喜び」というものはまさに欠かすことのできない大切な要素だったのです。

では、私たち自身の歩みはどうでしょうか？果たして私たち自身は日々喜びながら神様の前に感謝を表し続けているのでしょうか？この一年を振り返ってみたとき、喜びにあふれながら、喜びにあふれたその叫びや礼拝や歌というものを、いつもささげ続けてきたでしょうか？正直に自分の歩みを振り返ってみれば、おそらく私たちはこの点において、いろんな弱さや足りなさを覚えるでしょう。喜ぶことに難しさを覚えるような場面すらあったことと思います。では、どうすれば私たちはどんな時も変わらずに、こんな喜びをもって主の前に出ることができるのでしょうか？どうしたらみことばが教えているように、喜びにあふれながら主の前をいつも歩み続けることができるのでしょうか？その答えを、みことばは教えてくれていました。

続きを見れば3節にこう書かれていました。「知れ。【主】こそ神。主が私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。」その答えは、「主を知っていること」でした。皆さん、いろんなものを手にすることではありません。主を知っていることでした。3節はこんなことばで始まっていたね。「知れ。【主】こそ神。」と。ただここでちょっと覚えていてほしいのは、この「知れ」という

のは、単なる知識のことを表しているのではないということです。「知れ」というから、私たちはいろんなことを知らないといけない、いろんなことを知識として蓄えないといけないとされているように感じるかもしれませんが、このことばは、何かをただ知識として知っていなさい、ということの意味していたのではありません。これは何かを知っていること以上に、「それに親しみを抱いていること」、「自分と個人的な関係があるものとして認めるということ」を表していました。要するにここでみことばが「知れ。【主】こそ神。」というとき、これは神様についてたくさんを知っているということではなく、自分のこととしてその神様を深く知っていることを言うのです。自分と個人的な関係があるとして認めていることを言うのです。そしてそれが私たちの喜びに繋がるのだと。自分の神様として知り、自分の神様として心に覚え、自分の神様として認めるということが、どんなときも変わることはない私たちが喜ぶことのできる理由になるのだ、というわけです。ある人はどうしてと思うかもしれませんが。ある人はいったいどんな神様を知っていることが喜びに繋がるのかと思うかもしれませんが。その答えは3節に書いていました。3節は特に二つの神様の姿を描いてくれていたのです。いったいどんな神様を知るのか。3節の頭にこう書いていました。「知れ。【主】こそ神。主が、私たちが造られた。」と。

### ● “喜び” に繋がる神様の二つの姿：

#### 1) 神様は私たちの創造主 3 a 節

一つ目の姿、それは、神様は私たちの創造主だ、ということです。ほかのだれでもない神様が、この世界のすべてのものを、私たちひとりひとりをご自身の偉大な力によって創造されたのだというわけです。神様がすべてのものを造られました。改めてよく考えてみてください。神様がすべてを造られたからこそ、神様はすべてのものを今もご存じです。知らないことは何一つとしてありません。神様がすべてのことを造られたからこそ、神様はすべてのものを今も思いのままにすることができます。神様がだれかの助けを全く必要とせず、すべてをご自身の力で成し遂げられたからこそ、神様はすべてのものを今も変わらずにご自分の力、ただそれだけによって支配されているのです。どう考えてもこの神様は私たちと同じではありません。ここにいるだれのうちにも同じ力などありません。神様こそ創造主。私たちはただこの神様によって造られた被造物にしか過ぎないというわけです。そしてそんな被造物である私たちにみことばは言うのです。「知れ。」と。「【主】こそ神。主が、私たちが、私やあなたを造られた。」と。でもそれだけではありません。

#### 2) 神様は私たちの羊飼い 3 b 節

3節の続きにこう書いていました。「私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。」と。二つ目の姿は「神様は私たちの羊飼い」でした。私たちの創造主である神様は、同時に羊である私たちが養い、守り、導いてくださる、そんな羊飼いなのだともみことばを教えてくれていたのです。ご存じかと思いますが、羊というのは非常に臆病で、弱く賢くない動物でした。聞かれたことがあるかもしれませんが、以前羊飼いが目を離した隙に、約千五百頭の羊の群れが崖から次々に落ちてしまったというニュースもありました。ちなみにどうしてこんな悲惨なことが起こったのか、え？と思われるかもしれませんが、原因は非常にシンプルでした。朝食を取っていた群れの先頭が崖に気づかずに最初に落ち始めると、続いていた後の羊はつられてそのまま立ち止まることなく、ただ前の羊について落ちていってしまったというわけです。びっくりしますよね。そんなことありえますか？でもそれが羊だったのです。だからこそ、そんな羊にとって、羊飼いという存在は欠かせませんでした。羊の弱さを知っていてくれるその羊飼いというのは、弱い羊たちを養うためにどこに安全な牧草地があるのか、どこに安全な水飲み場があるのかもすべて知っていました。いつも羊のそばにいてくれて、敵や危険からも羊を守ってくれていたのです。こうして羊飼いというのは、羊を愛して気にかけてあげて、そして羊も、羊飼いのうちにあって安心や守りというものを見出していたのです。羊飼いと羊、彼らの間にはすばらしい関係がありました。そして皆さん、考えてみてください。みことばはここで、ほかのだれでもない神様がこんな羊飼い

なのだと言っていたのです。すべてを創られた創造主であるその神様が、同時に羊を養ってくれる羊飼いなのだと。羊である私たちの弱さや葛藤や必要、それらをすべてだれよりも知っていてくださるそんな羊飼いと主がともにいてくださるのだと言うわけです。そしてそのことを覚えるなら、そのような主を知っているのなら、私たちの心に喜びが自然にあふれるようになると思いませんか？

また特に今の私たちにとって何よりもすばらしい知らせ、それは羊飼いであるイエス様が羊である私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださったということです。覚えていますか？ヨハネ10：11でイエス様は確かにこう言われていたのです。「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」そのことばの通りに、イエス様は私たちの罪のために、ご自身何の罪も犯していないにも関わらず、みずから十字架にかかってくださいました。羊飼いである神様を拒んでさまよっていたのは、ほかのだれでもない私たち自身でした。頑なに神様に逆らい続けて、私たちこそ神様の御怒りが値する存在でした。しかし、そんな私たちの受けるべき罪の罰をこの方が代わりに背負って苦しみ死なれたのです。こうして羊飼いである主は値しない愛を私たちに一方的に示してくださいました。そしてこんな愛を示してくださったこの主を信じる者には、罪からの救いが、いやもっと言えば、最高の羊飼いがいつまでもともにいてくださると言うわけです。Iペテロ2：24-25にこう記されていました。

「：24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。：25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」皆さん、こんな主を知っているのなら、私たちの心に喜びが自然にあふれるようにはならないでしょうか？主を自分の神様として知り、自分の神様として心に覚え、自分の神様として認めるということ、これこそ私たちがどんなときも喜ぶことのできる理由でした。

もちろん私たちは日々の中で、神様が与えてくださっているものを喜ぶことができます。神様が働いてくださった状況というものを、私たちはいつも喜ぶことができます。でも同時に、ものや状況というものには時が経てば変わってしまったりするのです。そしてもし私たちの喜びが、ものや状況だけなら、私たちの喜びは色々なものによってすぐに影響されてしまうでしょう。でも私たちの喜びが主を知っているということに根差しているなら、この主は、決して変わることはないのです。私たちの愛する主はいつも偉大な力を持った創造主です。私たちの愛しているその主は、いつも羊である私たちを愛してくださいる羊飼いです。

だからもし、まだこのすばらしい主を知らない、何よりご自分のいのちを捨ててくださったこのイエス様を知らないという方がおられるなら、きょうこの方を知ってください。頑なになってこの方を拒むのではなくて、自分自身の救い主として、主として受け入れて、そしてどうかこの方にのみあるその最高の喜びを自分のこととして知ってください。

もうこの主を知っているという皆さん、私たちはいつも喜ぶことのできる理由を持っています。私たちが造ってくださった力ある創造主は、あわれみ深い羊飼いとするとともにいてくださると言うわけです。変わることなくいてくださると。その主を覚えるなら、私たちはその主に向かって、喜びにあふれた叫びを、喜びにあふれた礼拝を、喜びにあふれた歌をささげながら歩いていくことができるということです。「喜びにあふれながら」これが一つ目に主の前にふさわしい態度でした。

## 2. 感謝にあふれながら 4-5節

そして最後二つ目に主の前にふさわしい態度は「感謝にあふれながら」です。もう一度4節を見るとこう書いていました。「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたえよ。」と。先とは違って、今度は「感謝」ということばが繰り返されていました。みことばの教えはまたもや明白でした。喜びだけではありません。感謝にあふれて主の前に出るということ、それこそが私たちにとって最もふさわしい態度なのだというわけです。しかも興味深いのは、この最初の「感謝し

つつ」ということばには、想像できるように「称賛する」とか「感謝する」といったそのままの意味も含まれていますが、それに加えて、これにはもともと「認める」といった意味も含まれていました。つまり皆さん、ここで言われている「感謝しつつ」は、ただなんとなく「神様感謝します」ということばを発することではありません。神様がどんなお方なのか、神様が何をなされたのか、そのことをはっきりと認めて、そしてそれにふさわしい感謝をささげることを行っていたのです。神様がどんな偉大なお方なのか、神様が私たちの一つ一つのことに対してどんなことをなされたのかを私たちが認めるのです。認めて、そしてそれに感謝するのです。不平不満では当然ありません。求められていたのは、私たちが正しく主を覚えるということでした。心からほめたたえ続けるということでした。

でもこれもどうです？実際この感謝というものも、私たちは難しさを覚えることがあります。私もそうですし、時に私たちの中では、憤りや文句というものに心が支配されてしまいそうになる場面にだっ出て出くわすこともあります。私たちは感謝するということにおいても難しさを覚えることがあるのです。

だからこそこの詩篇の終わりのことばが大切でした。みことばは最後の5節に、どうして私たちがいつも主に向かって感謝するべきなのか、いや感謝できるのか、その理由を挙げていました。5節はこう続いていました。「【主】はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」と。読んで皆さんすぐに気づかれたかと思います。著者は何をしていました？著者は神様の姿というものをまたここに描いていました。どんな姿だったか？

### 1) 「主はいつくしみ深い」

一つ目に書かれていたのは「【主】はいつくしみ深く」と。言い換えれば、主はそのご性質も、成されることすべてにおいて、いつも良いお方だということです。いつもすばらしいお方だということです。いつも優しいお方だということです。確かに私たちの目にそう見えないこともあります。でもこの方は確かにいつも変わらず寛大で、ご自分を愛する者のためにすべてを働かせて益としてくださるお方でした。ローマ8：28にこう書いていました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

### 2) 「主の恵みはとこしえまで」

また同時にこの主は、ただいつくしみ深いだけではありません。続いて二つ目「この主の恵みはとこしえまで」と。要するに皆さん、主の恵み、主の愛やあわれみというものは、いつまでも決して変わることがないということです。言うまでもなく、多くの人が考えるようなこの世の愛とは全然違いました。愛したい人は愛しましょう、愛したくない人には愛を示しません。・・・そういった感情やその場の状況によって容易に左右されてしまうものでは全くありませんでした。この主の愛というのは、神様ご自身の変わらない約束に基づいているものだからこそ、どんなときも決して変わることがなかったのです。ジェームス・ボイスという註解者もこの愛を次のように説明していました。「神は『愛』です。この愛は『永遠に続く』ものです。…これまでも神は愛されていたのでしょうか？もちろんです。それなら、この先もいつも愛してくださるでしょう。神の本質そのものが愛なのです。あなたは愛されることがなくなると心配する必要はありません。」これが、私たち信仰者が持っている確信でした。神様の私たちに對する愛というのは、良い時もとえ悪い時でさえ変わらず私たちとともにある、というわけです。

### 3) 「主の真実は代々に至る」

そして最後三つ目にこう続いていました。「主の真実は代々に至る。」と。神様はいつも良いお方で、その愛というものが決して変わらないだけではありません。この神様のご性質においても、またそのことばや約束においても、いつまでも変わることがないお方でした。さらに言うと、主はご自分が約束されたことであればどんなことであろうと必ずその通りに成し遂げられるお方だということです。昔も今もそのことばに偽りはありませんでした。歴史がそれを私たちに教えてくれています。失敗も過ちもいつ

さいありませんでした。常に真実だったのです。みことばもこう言っています。Ⅱテモテ2：13「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」そしてそんな主であるからこそ、私たちはどんなときでも信頼して歩むことができました。この方が真実なお方であるからこそ、たとえ主の恵みが感じられないような場面にあったとしても、必ず主は約束の通りに自分のものを愛してくださって守り導いてくださると、揺るがぬ確信を持つことができるのです。皆さん、私たちとともにいてくださる主は、すばらしいお方でした。いつもいつくしみ深く、その恵みはいつも変わることがなく、そしてその真実というものはいつまでも決して変わることはない。そしてそんな主の姿を私たちが覚えるのなら、そんな主の姿を私たちが知っているのであれば、そうしたら、それぞれの心に自然にあるものが生まれてくると思いませんか？この主に対する感謝というものがあふれてきませんか？感謝するということが、それこそが主を知っている私たちにとってどんなときも最もふさわしい態度でした。

改めて最後に考えてみてください。果たして私たち自身は日々喜びながら神様の前に感謝を表し続けているのでしょうか？この一年を振り返ってみたときに、心からの喜びや感謝というものを主に向かってささげ続けてきたのでしょうか？一つ確実に言えることがあります。それは、もし私たちがみことばの描いているその神様の姿ではなくて、それぞれが勝手に思い描いている姿に神様を当てはめようとしているのなら、容易に喜びは失われていくということです。あまりにも巨大なその神様の姿を私たちが勝手に小さく考えているなら、容易に私たちの感謝は失われていくということです。だから決して忘れてはいけません。神様は偉大な創造主でした。神様はあわれみ深い羊飼いでした。これまでもすべてをご自身の意のままにされてきた、そしてこれからもされるその力を持っておられ、これから先もご自分の約束を必ず成し遂げられるそのお方が、私たちの神様でした。それが私たちとともにおられる主だということです。そのみことばが教えている主の姿を、私たちは忘れることがないように。

このように私たちは一年をかけていろんなことを学んできて、主の姿というものを考え続けてきました。でも同時に、まだこの中のだれも、この方の偉大さのちっぽけな部分さえ、知っている者はいません。私たちはまだまだこの主のすばらしさをわかっていません。だからこそ満足することなくこの主のすばらしさを続けて考えていきましょう。来年もみことばから、この主が私たちにとって、いかに、ありえないほど大きなお方なのかということ学び続けていきましょう。そのようにして私たちが主を知っていくというのは、この礼拝の時だけではありません。教会学校でも同じです。男性会でも女性会でも、それぞれの交わりでも、学びの時でも全部同じです。私たちは主を知って、そしてそのすばらしい主を喜び、感謝する者として、歩み続けていくわけです。その主を覚えながら、続けて一緒に歩いていきましょう。